

香雪美術館所蔵「稚児観音縁起絵巻」の成立に関する一考察

佛教大学 多川 文彦

香雪美術館所蔵「稚児観音縁起絵巻」は、興福寺の子院の一つである菩提院大御堂の本尊阿弥陀如来坐像脇壇に、現在秘仏として安置されている木造十一面観音立像の靈驗を端的に描く作品である。従来、当作品は流麗な大和絵で描かれるシンプルな画面構成を有するにも関わらず、作品そのものについては渡辺一氏や小松茂美氏の指摘以外、いずれも作品解説に留まるものであった。かつて、阿部泰郎氏は広く中世における童子の聖性をめぐり、その独特な宗教世界の一例として当作品を取り上げ、筆者自身も拙稿において当作品の「縁起」としての性格をめぐって、詞書の典拠である『長谷寺靈驗記』との比較を通して考察し、舞台となる菩提院のトポス性について迫ったこともあったが、いずれにしても作品の全体像を照射するには至っていない。以上の先行研究を踏まえ、本発表は当作品の美術史上の位置付けを問う基礎的考察として、画面分析と詞書の校合を通して、特にその制作背景について一試論を提示するものである。

当作品の主題についてキーポイントとなる史料が詞書の典拠となる『長谷寺靈驗記』所収話である。詞書の校合の結果、登場人物や発端、物語の経過や後日譚などに差異が認められる。「稚児観音縁起絵巻」は説話特有の再生を働かせ、新たな靈驗譚として再構築されているため、縁起の変容過程を留意することにより、当作品の機能とその深層を探る。特に観音出現の場所を松の上であることを記さず法華経書写の功德を記す点は、菩提院が法華三十講に絡む菩提院三十講を開催していた歴史背景を考慮に入れることが可能であり、法華経の利益により稚児が観音として顕現することを示唆し、菩提院への参詣を暗に促す点については留意したい。

画面表現においては、作品中に描かれる棺の前で嗚咽する上人の姿、そして稚児を供養する二つの場面において、須弥壇上に描かれる来迎雲に着目し、南都ゆかりの十一面観音来迎図様との関わりについて試論を提示する。当該場面は来迎相を描くことによって、その化身として転生することを絵巻の観者に示唆した画面であったと想定され、この描写が求められた背景として、南都における十一面観音による来迎と引接を期待し、信仰していた精神基盤の存在が注目される。南都における十一面観音来迎図様の制作と、菩提院に伝わる稚児観音という特異な由来が「稚児観音縁起絵巻」成立の契機となったことが想像され、観音が有する土地信仰的性格を考慮すると、菩提院に安置されている稚児観音は当時の南都における重要な信仰対象であったと考えられる。その由来を僧侶と稚児との邂逅・受難・奇瑞を語りの中心に説いて視覚化し、像が伝来したトポスの靈性を強調する目的が当絵巻成立の一要因として考えられ、観音による利益と救済を絵巻の観者に訴える要素を持つ絵巻として顕在化した作例である点について指摘したい。